

名古屋大学 プロフィール 2006



今、社会が大学に寄せる期待は、大きく変貌しつつあります。
学術研究の高度化や学際化、国際化だけにとどまらず、
社会貢献や産学連携など、
大学には従来の枠にとられない新たな提案が求められています。
こうした変革のさなかにあって、
名古屋大学は、平成16年4月、「国立大学法人名古屋大学」へと生まれ変わり、
社会の要請に応えて、着実に歩みを進めてきました。
その礎には、昭和14年の創設以来、わが国の基幹総合大学として、
世界屈指の知的成果を生み出し、国内外へ優れた人材を輩出してきた伝統があります。
さらに、人文、社会、自然の学問分野を越えた、自由な交流の風土があります。
さまざまな知が集まり、互いに結びつき、高めあう。
そんな進取に富んだ研究・教育の場として、名古屋大学は、次の未来を拓いていきます。

【 巻頭対談 】
開拓者でありつづける

赤崎 勇 Isamu Akasaki
名古屋大学特別教授

平野 眞一 Shin-ichi Hirano
名古屋大学総長

【 特集 】 高等研究院
名古屋大学 の 意思として、
世界最高水準を追う

北住 炯一 Keiichi Kitazumi
高等研究院長

上村 大輔 Daisuke Uemura
大学院理学研究科教授／高等研究院教員

関 華奈子 Kanako Seki
太陽地球環境研究所助教授／高等研究院教員

松澤 和宏 Kazuhiro Matsuzawa
大学院文学研究科教授／高等研究院教員



【 巻頭対談 】

開拓者でありつづける

赤崎 勇 Isamu Akasaki
名古屋大学特別教授

平野 眞一 Shin-ichi Hirano
名古屋大学総長

道を拓く志ある人を育み、 知の発信拠点へ、産学連携の指標へ。

国立大学法人名古屋大学は、法人化後、さまざまな改革を進めながら、世界屈指の知的成果の創生と、勇気ある知識人の育成を目標としています。こうした名古屋大学のビジョンを踏まえつつ、研究者としての志や大学の果たすべき役割、産学連携のあり方などについて、世界で初めて青色発光ダイオードを実現した赤崎勇特別教授と平野眞一総長に語り合っていました。

研究人生を前人未踏の夢にかけて。

平野 赤崎先生はこれまで素晴らしいお仕事をされていらっしゃると思いますが、その中でも私どもが名古屋大学モデルにと考えておりますのが、先生が開発された「青色発光ダイオード」での企業との連携です。そこに至るまでの先生の研究人生をお話いただけますか。

赤崎 私が大学を出て最初に取り組んだのは、TVのブラウン管の製造現場で蛍光体を扱う仕事でした。それは、まさに私にとって化合物半導体と熱を持たない光（ルミネッセンス）との出会いだったんですね。そして、1959年に名古屋大学工学部電子工学科へ招かれ、上司とともに半導体講座を立ち上げたとき、もう一つの私のキーワードである半導体の単結晶と出会いました。私は“結晶、光、半導体”との50年の研究人生において、常にいずれか2つの研究に取り組んできました。1964年以降は、その3つを一体として仕事をしてきたのが今につながっていると思います。

平野 先生の研究の契機は、この名古屋大学にあったわけですね。

赤崎 その後、松下電器産業（株）の研究所に入り、窒化ガリウムを中心とする化合物半導体を自分のテーマに定めました。当然、発光ダイオード、レーザーダイオードは視野にありましたが、青色は実現不可能とされていました。しかし、これが逆に私の夢になったんですね。夢のデバイスだからこそどうしてもやろうと、志を立てたのが1960年代の末

です。また、窒化ガリウムでのp-n接合は理論的にもできないと言われ、多くの人が挑戦してはあきらめていきましたが、私は前人未踏だからこそ自分のライフワークにしようと考えました。「夢を追う」「誰もできないからこそやる」、これが私の研究の原動力でした。できるという確信はない。でも、自分がやらないでどうするという思いでした。

平野 先生の信念は、名古屋大学の若い人たちにもぜひ伝えたいと思います。多くの研究者が青色をあきらめ、一人去り二人去りという状況の中、ただ一人荒野を行くというお気持ちで志を全うされたことには感服いたします。昔、私は父に「人間は愚直でいいんだ」とよく言われましたが、先生のお話を聞くと思い出されます。

赤崎 愚直でなければ、この仕事はできなかったと思います。あるとき、インタビューで「なぜ先生だけがあきらめなかったのか?」と聞かれましたが、私は「見通しのきく方はp-n接合はできないと先を読んでやめた。でも私は、先を読まなかったんです」とお答えしました。研究人生において私が貫いてきたものというのは非常に平凡なことで、一言で言うと、志を立てたら決してあきらめない、それだけです。

産学連携の名古屋大学モデルとして。

平野 私は事あるごとに、名大には赤崎先生という産学連携のモデルがいらっしゃる、とお話するんです。青色発光ダイオードでの産学



連携は先生が学術の基礎を極め、その成果の一つに豊田合成さんが注目し、その価値をご理解いただいたという経緯がありました。先生の志と企業の理解がなかったら、今日の青色発光ダイオードの発展はなかったでしょう。私はこのような先生の歩みを、名古屋大学のモデルにしたいのです。学術の基盤を築きあげ、出てきた成果については産学が同じ土俵で連携をとってモノにする。これが本来の大学の姿であり、大学は短期に成果があがるものだけに飛びつくべきではないと思います。

赤崎 最近は、性急に結果を求めすぎる傾向がありますね。大学人の研究をもう少し長い目で見ていただければと思います。そのためには、科学の大切さを社会の人々にわかってもらえるよう啓発していくことも必要です。世界的に見て、日本人は知的レベルが高いにも関わらず、科学研究の意義になると関心が低い。その責任は科学者にもあるわけですから、これからは啓発活動にも力を入れる必要があるでしょう。

平野 今年、「赤崎記念研究館」を竣工しますが、これは社会にもインパクトを与えるのではないのでしょうか。私はこの館を名古屋大学だけでなく、日本の、世界に誇るべき産学連携のイノベーション拠点と考えています。また、先生の研究の社会的意義については、皆さんよくご存知でしょう。発光ダイオードはTVのディスプレイや交通信号灯に利用されていますし、今後は白色LEDもでき、未来は“結晶、光、半導体”分野の学術の進展で、新しい応用も切り拓かれていくと思います。

赤崎 過大な期待はさげなければなりません、青色ができて白色もできるわけですが、白色光源は、単に固体照明というだけではなく、電球のアナログ光源に対してLEDやレーザはデジタル光源ですから、すべてがデジタル化できる大きな可能性があります。光源だけを見ても、植物栽培や医療用の特殊光源など、多様な分野に利用されることは間違いないでしょう。また、窒化物半導体は、発光デバイスにとどまらず、近未来に不可欠の超高速電子デバイスや、高感度紫外線センサーなどの実現には最も有望な材料です。

世界的研究を育む伸びやかな風土。

平野 先生の研究に、名古屋大学の土壌というものは影響を与えたのでしょうか。

赤崎 私は1959年から5年間、名古屋大学にお世話になりましたが、この5年間こそが私の研究人生の原点です。名古屋大学の環境は私に真剣に研究と向き合わせてくれました。企業と比べると何もないので、“考える”機会を与えてくれました。それが良かったんですね。また、名古屋大学は帝国大学の中では末っ子大学ですから、出身や経歴などを問わず全国から新進気鋭の先生方が集まっておられ、しがらみのない伸びやかな風土がありました。先達に学んだのは、モノの見方、考え方です。そういうものが私の肥やしになっています。その後、企業の研究所に最年少の室長として転出しましたが、周りは偉い方ばかりで本当は萎縮するような環境なんだろうが、この名古屋大学での5年間の私の寄りどころとなり、何が来ても怖くないという自信を持つことができました。

平野 先生が再び教授として名大へいらした頃、私は学生で結晶の分野にいましたので、本当にいろいろ教えていただきました。

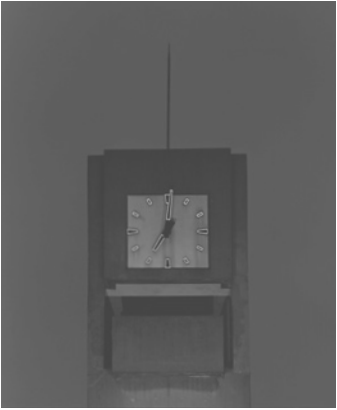
赤崎 よく覚えています。その頃、名古屋大学は前より規模が大きくなり、既に立派な位置を占める大学になっていましたね。私が幸運だったのは、名古屋大学の先生方の心が非常に広がったということです。私の仕事は当時、既製の実験装置がなく、また材料も高い。しかも、クリーンルームまで必要です。ところが、当時の先生方はほとんど全国大学初のクリーンルームの設置をはじめとして、物心両面でサポートしてくださった。私にとって、この寛大さが何ものにもかえがたい大きなはげみとなりました。おおらかな学風、広い心、自由闊達な風土というのは、名古屋大学の大きな財産ですね。

平野 その通りです。我々は先生がいらしたときの名古屋大学の風土というものを、大事に継承していかなければなりません。

壁を越えていく人材を育成する。

平野 もう一つ、私が今後の大学のあり方のモデルになると考えているのは、理学部で化学を専門とする先生が、異分野である半導体のトップまでいかれたという点です。専門を越えて自分の基礎とするところをうまく使い、誰もやらなかった分野を開拓されたというのは、別の意味で若い人たちに新しい道を示すことになります。

赤崎 総長もよくおっしゃるように、大学で基礎をしっかりやれば、極端



豊田講堂時計台の文字盤には
青色発光ダイオードを使用

なことを申せば、どの方向にも進めるのです。また、当時の名古屋大学は私のような違う学科出身で、しかも企業経験が長くてまとまった仕事はしていない者を最先端の電子工学科へ、しかも2回目は教授として迎えてくださった。これは異例のことで、そのご英断に驚き感謝するばかりです。私も、人生意気に感ずーとの思いでした。

平野 先日、国際諮問委員会でも優秀な若い方をどう発掘するかという話が出て、“smell”が決め手だということになりました。ただ、この“smell”というものを判断される方々が重要なわけで、“smell”をつかまえない人であれば、いい方を逃してしまいます。その意味で、名古屋大学には先生と呼ばれた素晴らしい先生方がみえたのですね。また、赤崎先生は次の人たちをしっかりと育ててくださっていますが、大学は組織として基盤を作って優秀な方を発掘し、よく教育をし、ときには旅をさせ、また帰ってきていただくという仕組みが必要だと思います。

赤崎 大学が成すべきことで、一番大切なことは、次を担う人を育てることです。学生であれ、今の研究の後を継ぐ人であれ、学術を発展させる人であれ、人材を育てることが最も大切ですね。これは法人化後も、大学が果たすべき変わらぬ役割の最たるものだと思います。もう一つは、世界に誇れるような知の創造、これが大事なことだと思います。

平野 私も先生のお言葉を胸に、力の限り若い人たちを育ててまいります。また、私どもは「世界屈指の知的成果を産み出す」という理念を掲げておりますが、さらに学術研究を推進し、世界に知を発信する名古屋大学にしたいと思います。本日は貴重なお時間をありがとうございました。



平野 眞一 Shin-ichi Hirano

1942年生まれ。名古屋大学大学院工学研究科応用化学専攻博士課程修了。工学博士。無機材料化学、セラミックスを専門分野として、金属有機化合物の無機質化による無機機能性材料の合成、高機能結晶の水熱合成など多岐にわたる研究テーマで工学の未来を切り拓く。アメリカセラミック学会フェロー。名古屋大学大学院工学研究科教授、名古屋大学大学院工学研究科長・工学部長を務め、2004年4月名古屋大学総長に就任。



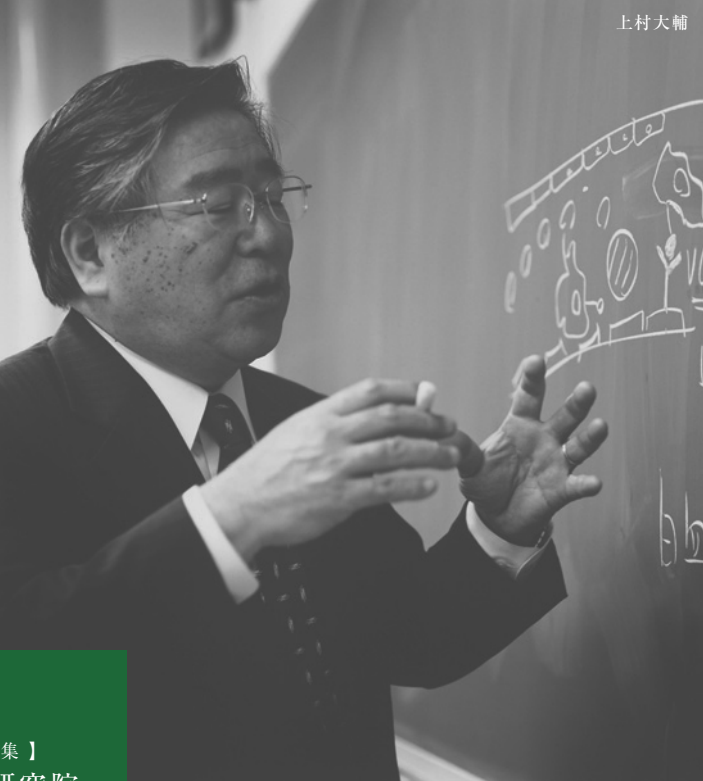
赤崎 勇 Isamu Akasaki

1929年生まれ。京都市理理学部卒業。工学博士。松下電器産業（株）東京研究所基礎研究室長時代から、窒化ガリウムなど化合物半導体の研究開発を進め、1981年名古屋大学工学部電子工学科教授に。1989年、世界初の青色発光ダイオードを実現した。また、豊田合成（株）との産学連携を推進。2004年、文化功労者顕彰、2006年、日本人として初めてJohn Bardeen 賞を受賞。現在、名城大学教授、名古屋大学特別教授。

【 巻頭対談 】
開拓者でありつづける



北住 炯一



上村 大輔

【 特集 】
高等研究院



松澤 和宏



関 華奈子

名古屋大学 の 意思として、世界最高水準を追う

2002年4月、名古屋大学は、全学の意思のもとに世界最高水準の研究を展開するための新しい組織として、「高等研究院」を創設しました。部局を越えて新たな学問分野を拓き、成果を社会へ発信する役割を持つこのシステムは、名古屋大学の存在感を世界へ示すとともに大学全体を刺激し、研究活動のさらなる向上につながっています。

日本初の研究専念組織として、「知の最高コミュニティ」を創出し、国際的なプレステージを高めていきます。

高等研究院は日本の国立大学で初めての研究専念組織として創設されました。名古屋大学は学術憲章において「世界に誇りうる最高水準の学術研究を目指す」という趣旨の宣言をしています。高等研究院はこの目標の実現に向けた活動を推進しています。その特徴は研究専念環境の提供にあり、これまで高等研究院教員は名古屋大学を代表する研究成果を生み出してきました。また、フォーラムやセミナーなどを通じて国内外への研究成果の発信にも力を入れています。

現在、私たちは今後を見すえて多様な計画を練っていますが、その中の一つが若手育成のためのテニュアトラック制度の立ち上げです。国内外で研究者を公募し、将来の名古

屋大学を世界的に担う逸材を発掘したいと考えています。また、来年度からの実施に向けて「全学初年次教育プログラム」の準備も進めています。名古屋大学が誇る「最高知」を有する高等研究院教員に教えてもらうことで、学部1年生が学問の面白さに目覚めるきっかけになるのではないのでしょうか。

今後は、特定の研究部門や領域を置かない高等研究院だからこそ、学問分野を横断した研究の更なる展開が期待されます。超領域的な知的交流によって、新しい次元を切り拓くことができると考えるからです。

このような様々な取り組みを通して、「知の最高コミュニティ」としての高等研究院の国際的プレステージを一層高めたいと思います。



高等研究院
名古屋大学における最高水準の研究活動を推進し、世界的に卓越した研究成果を挙げるため、2002年4月に創設された研究組織。研究プロジェクトは、毎年、学内から公募。採択された教員は授業や管理運営に関わる実務が軽減され、一定期間、研究に専念できる。研究期間は最長5年。高等総合研究館の研究スペースが提供される。

高等研究院の教員構成
3年から5年にわたって研究プロジェクトに専念する高等研究院教員（現在31名）と、管理運営、研究環境の維持・充実、広報活動などを行う基幹教員5名、運営推進委員（7名）によって構成される。

テニュアトラック制度
テニュアとは終身在職権を持つ研究者の職位であり、テニュアトラックポジションはテニュアになり得る研究者の職位で5年間の任期がある。テニュアトラックポジションとして採用された若手研究者は、中間評価及び最終評価によって、テニュアを取得できるかどうか審査される。アメリカの大学では一般的。

北住 炯一 Keiichi Kitazawa
高等研究院長

1943年生まれ。専門分野は西洋政治史。大学院法学研究科長を経て、2005年、高等研究院第4代院長に就任。高等研究院を研究面での名古屋大学の顔として位置づけるために、制度の充実や各種の発信活動に取り組むとともに、高等研究院教員の研究専念に力を尽くす。



上村 大輔 Daisuke Uemura
大学院理学研究科教授／高等研究院教員

1945年生まれ。理学博士。専門は天然物有機化学。高等研究院における研究プロジェクト名は「生態系ダイナミズムに着目した物質探索法」。2005年度「日本化学会賞」を受賞。2006年「第25回天然物化学国際会議・第5回生物多様性国際会議（IUPAC2006）」では組織委員長を務める。



関 華奈子 Kanako Seki
太陽地球環境研究所助教授／高等研究院教員

1972年生まれ。博士（理学）。専門分野は宇宙空間プラズマ物理学。高等研究院における研究プロジェクト名は「比較惑星学的視点の導入による固有磁場強度が地球周辺宇宙環境に与える影響に関する研究」。2001年、米国地球物理学会よりFred L. Scarf Award受賞。



松澤 和宏 Kazuhiro Matsuzawa
大学院文学研究科教授／高等研究院教員

1953年生まれ。博士（文学）。専門はフランス文学。波沢クローデル賞本賞受賞。高等研究院における研究プロジェクト名は「ソシュールの草稿の生成論的研究」。2002年より21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」文学部門責任者。国際シンポジウム「テキストとその生成」および「ソシュールとテキストの科学」ではコーディネータを務める。

付加価値の高い新物質の発見を通して、高等研究院の存在意義を向上させたい。

カイメン動物のなかにはなんらかの有毒物質を生産し、サンゴを殺しながらその表面を覆い棲んでいるものもいます。その有毒物質とは一体どのようなものなのでしょうか。また、ツメタ貝はアサリの貝殻に丸い穴を空け、中身を食べてしまいます。この現象にはどのような化学物質のやりとりが存在するのでしょうか。このように自然界には、化学のメスが届いていない生物現象がたくさんあります。私たちは不可思議な生物現象を直接観察し、最先端の化学的手法を駆使して解析する

国際協力的一方で世界との競争も熾烈。集中して研究に取り組み、独自の成果を出せればと思っています。

太陽系の惑星は磁場の違いが特徴の一つで、私は数年前から固有磁場に注目してきました。その流れを受けた研究プロジェクトでは、地球の固有磁場強度が現在より弱まった場合に、大気流出量と高エネルギー粒子生成過程がどのように変化するかを調べるために必要な、数値実験手法の基礎の確立を目標にしています。これが実現すればさまざまな応用が可能で、宇宙プラズマ物理学の各種の研究にブレークスルーをもたらすステップになるはずです。ただ、数値実験手法の開発は、科学的な成果を出す前の検証に時間がかかります。その点では、世界の研究者がしのぎを

言語、文化の壁が高い人文学系の世界的な研究を、心強く支援する土壌があります。

フェルディナン・ド・ソシュールは、「現代言語学の祖」と呼ばれるスイスの言語学者です。20世紀の構造主義や記号論のバイブルとされ、ソシュールの名が冠せられる『一般言語学講義』は、彼の死後、弟子たちが編纂執筆したもので、彼は生前に刊行を断念していたことが判っています。私はこの謎の沈黙に迫るため、彼の自筆草稿の研究を進めています。彼の推敲過程を解明するにはスイスでオリジナルと向きあうほかはなく、高等研究院に採択され時間を得たことで研究も進展しました。今年6月末から世界初となる推敲過程

ことで、斬新な新物質の発見を目指しています。その発見は、新しい薬剤開発や、生物間相互作用の解明など、さまざまな分野に応用できるものと考えています。

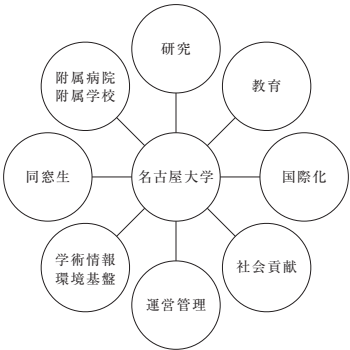
細胞生物学や遺伝子関連分野など、他分野の研究者と交流できる今の環境は、研究を深化させていく上でとても大きなメリットだと感じます。これからも付加価値の高い新物質を発見し、その成果を発信することで、高等研究院の存在意義向上に努めていきたいと考えています。

削る中、高等研究院で初期開発の重要な時期に集中して研究できる意義は大きいと思います。また、私自身は宇宙プラズマ物理学と惑星科学の間に立つような研究を進め、主に仏国や米国の研究者と共同研究をしています。高等研究院には幅広い分野の先生方が集まられていますので、専門の異なる先生とも共同研究ができれば、おもしろい発見があるかもしれません。今後の展開が楽しみです。

太陽地球環境研究所
名古屋大学にある附置研究所の一つで、1990年に設置。太陽から地球まで、宇宙科学と地球科学の両方にまたがる学問領域を探究し、日本屈指の規模と内容を誇る。全国各地に観測所を設置しているほか、海外でも共同観測を展開している。

を復元した生成批評版を、ソシュール研究所を主宰する研究者のサイトで順次公開し、その後、フランス語と日本語で注釈を付した生成批評版を出版する予定です。
人文学系の研究は言語や文化の壁が高く、世界水準に達するのは難しいと言われます。しかし、私はソシュール研究にチャンスを見出し、ライフワークとして取り組んでいます。高等研究院の支援もあって結実しつつあることは大きく、文系理系問わず世界的な研究を推進するその存在価値を実感しています。

名古屋大学では21世紀の基幹総合大学として、
明確な目標を掲げ、教育・研究活動を推し進めています。
この冊子では、「研究」「教育」「国際化」「社会貢献」「運営管理」
「学術情報・環境基盤」「同窓生」「附属病院・附属学校」という
八つの戦略ドメインに沿って、
目指す大学像を明らかにしていきます。



【研究】 14	森 郁恵 大学院理学研究科教授 八島 栄次 大学院工学研究科教授 澤田 誠 環境医学研究所教授 河野 正憲 大学院法学研究科教授
【教育】 16	国際開発研究科 速水 敏彦 大学院教育発達科学研究科教授 プロセス基礎セミナー 工学部化学・生物工学科 分子化学工学コース 伊藤 秀郎 医学部保健学科教授
【国際化】 18	周藤 芳幸 大学院文学研究科教授 石川 クラウディア 留学生センター講師 外山 勝彦 大学院情報科学研究科助教授 堀上 美里 情報文化学部・情報科学研究科 教務学生掛員
【社会貢献】 20	創造工学センター 東村 博子 大学院生命農学研究科助教授 太田 美智男 大学院医学系研究科教授 清水 裕之 大学院環境学研究科教授
【運営管理】 22	杉浦 康夫 理事(病院・施設整備・環境安全関係担当) 西川 輝昭 名古屋大学博物館長 高桑 宗右エ門 大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター長 伊東 多加志 全学技術センター部局系技術支援室医学技術系 技術長
【学術情報・環境基盤】 24	古書の会 多元数理科学研究科教育研究支援室 伊藤 正彦 情報連携基盤センター事務長
【同窓生】 26	情報科学研究科同窓会 山下 興重 中部大学 学長 市原 好二 日本銀行京都支店長 吉井 信雄 名古屋市交通局長
【附属病院・附属学校】 28	教育学部附属中・高等学校 スーパーサイエンスハイスクール推進委員会 相馬 孝博 医学部附属病院医療安全管理部助教授 三浦 昌子 医学部附属病院看護部長

知を結ぶ人々

ここからは、各戦略ドメインにたずさわる
さまざまな人々やグループが登場します。
名古屋大学という「知のコミュニティ」の今を、
立場の異なる視点から紹介しながら、
この大学に、確かに息づく限りない未来を語ります。

国際レベルの研究拠点として、最先端の知を求め、学際的最前線に立つ。

人文・社会・自然の各分野を網羅する国際レベルの研究拠点として名古屋大学では、研究環境の整備や研究者の支援を行っています。専門分野における最先端の研究を追求する一方、学内はもとより国内外での共同研究や、産学連携の取り組みなど、あらゆるものを越境していく学際的な交流を進めています。



ノーベル賞予備軍が続々と生まれる、自由でおおらかな研究風土です。

名古屋大学の研究環境において、最大の魅力は人です。理学研究科の先生方が目指しているのは各分野の頂点であり、インターナショナルスタンダードを共有しているのを実感します。また、ざっくばらんな雰囲気で、誰もが裏表なく意見を戦わせることもあります。もちろん皆さんその後はさっぱりしたもので、こういう気風は日本の大学では、なかなかないと思います。

実際、名古屋大学の自由な環境に愛着を感じている方は多いです。思いきり研究に打ち込むことで成果が出せたという方もいます。ノーベル賞を受賞された野依教授に代表されるように、ここにはノーベル賞予備軍のような方がたくさんいますが、それもこの風土と無関係ではないかもしれません。

そんな大学ですから、学生たちが大きく成長するのも特長です。若い学生が理学研究科の研究室に配属され、世界の頂点にいる先生やそれを目指す先輩の学生の存在を知るとは、その後の人生において、とても重要です。その実体験は、人の意見を取り入れることのできる素直さに通じます。私は、そのような素直さを持った学生の一人ひとりの個性に応じて、直観力や洞察力を身につけさせ、自分で考えることができ、その考えに自己責任を取る。そんな、どこへ出してもやっていける科学者を育てたいと思っています。それに、研究で結果が出たときの喜びやそのときの経験は、研究者としてはもちろん、人生においても、どんな場面に遭遇しても自信になるはず。そう私は信じています。

野依良治教授

日本が誇る世界的な化学者。名古屋大学理学研究科教授を経て、現在、理化学研究所理事長、名古屋大学特別教授。2001年、「触媒的不斉水素化反応に関する研究」でノーベル化学賞受賞。名古屋大学内には受賞を記念し建てられた「野依記念学術交流館」「野依記念物質科学研究館」がある。

分野間の壁が低く、横断的な共同研究によって新たな視点が得られます。

分野間の壁が低く風通しがよい。それが名古屋大学の印象です。横断的な共同研究がしやすく、僕も専門とは別に、電気工学や量子工学の先生と一緒に研究を進めています。また、現在、高等研究院教員とERATOプロジェクトリーダーとの二足のわらじを履き、全学を挙げてプロジェクトをご支援いただいていますが、そこにも名古屋大学の懐の深さを感じますね。

プロジェクトでも全国から化学や物理、バイオなどの研究者が集まり共同研究をしています。やはり分野の違う人が知恵を寄せ合うと新しい視点が得られます。その意味で、名古屋大学は研究者にとって刺激的な環境と言えるでしょう。また、教員の得意とする領域で力を発揮できるシステムもできあがりつつあり、今後の発展に期待を寄せています。



八島 栄次 Eiji Yashima
大学院工学研究科教授

1958年生まれ。専門は高分子化学。超構造らせん高分子の人工的な形成とその制御技術で大きな成果を挙げ、現在、科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業(ERATO)「八島超構造らせん高分子プロジェクト」研究総括。

研究者や企業とのつながりを縦横に伸ばせる環境に、可能性の広がりを感じます。

脳は薬を飲んでも、その成分が到達しにくい性質を持っています。現在私が取り組んでいるのは、脳内細胞の一種である「ミクログリア」が持つ特殊な機能を利用することで、脳に有用物質を送り込むための技術の開発です。さらに、脳以外の臓器にも薬剤をピンポイントで送り込むための応用研究、そして、なぜミクログリアが特殊な機能を持っているのかを探るための基礎研究も進めています。

基礎研究と応用研究、どちらの研究においても重要なのは、他分野の知・技術とのつながりです。多彩な研究科・学部を擁し、また、産学連携にも積極的に取り組んでいる名古屋大学には、研究者や企業とのつながりを縦横に伸ばせる環境があり、可能性の広がりを感じます。



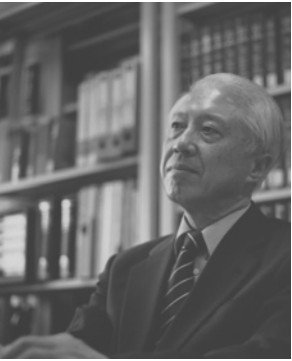
澤田 誠 Makoto Sawada
環境医学研究所教授

1958年生まれ。特殊な細胞が血液中から脳へ侵入し、疾患部位に集積することを世界に先駆けて発見した。研究成果の実用化を目指して自ら設立したベンチャー企業の最高研究開発責任者も務める。また「産学官連携推進本部」の一員としても活躍。

かつてない発想を実現する行動力があればこそ、研究拠点として飛躍できる。

裁判制度、特に民事訴訟制度は国によって大きく違います。また、国際的な取引が広がるにつれ、紛争も多様化しています。こうした法制度や法文化の違いによる国際訴訟の問題を解決していくために、我々は世界的な法律家ネットワークを作り、共同で議論を行う体制を構築しています。

この研究の移動に名古屋大学が果たした役割は大きく、難しいとされる海外の大学との実質的な研究協力もフライブルク大学との間の協定により、実現し、さらに現地に研究所を作り、研究者を採用することもできました。今までにない発想をよくぞ形にできたと、協力いただいた海外の研究者や大学の皆さんには感謝するばかりです。これを機に、名古屋大学は比較法の国際的研究拠点として、大学を越え、国を越えて羽ばたける存在になれば幸いです。



河野 正憲 Masanori Kawano
大学院法学研究科教授

1944年生まれ。専門は民事訴訟法、倒産法、仲裁法。科学研究費(学術創成研究)による「国際的ビジネス紛争の法的解決の実効性を高めるための新たなフレームワークの構築」の代表。ドイツ・フライブルク大学における名古屋大学ビジネス訴訟研究所を設置。

戦略的創造研究推進事業 総括実施型研究(ERATO)

「ERATO」とは、Exploratory Research for Advanced Technologyの略。科学技術振興機構によるプロジェクトで、新しい科学技術の流れをつくる基礎的研究支援を目的とする。約5年間の研究期間中、十数名の参加研究員は共同研究に従事する。

充実した教育環境から巣立つのは、次代を担う、人間性豊かなリーダーたち。

名古屋大学では、「豊かな人間性を持つ、勇気ある知識人の育成」を教育のミッションとして掲げています。

学生一人ひとりの課題の探究力と解決力を高めるため、質の高い教育プログラムを提供し、教育体制の充実も推進。

国内外で指導的役割を果たす人材を育成します。



問題解決能力を鍛える実地研修が、開発現場で活躍できる人材を育てます。

国際開発研究科では、途上国の開発について学際的な研究・教育を行い、国際開発協力分野で活躍できる人材の育成に努めています。その中の目玉となっているのが、修士1年を主な対象とした海外・国内実地研修です。学生は、多様な問題が複雑にからみあう開発現場の状況を肌で感じながら、問題解決の方法を考えます。

海外実地研修の場合は、学術交流協定校の教員や学生との共同調査を体験します。昨年はカンボジアの農村に2週間ほど入り、農民と話し合う機会を持ちましたが、この研修以外ではなかなかできない体験でしょう。

実地研修を大学院の正規カリキュラムとして十数年

間継続した例は国際的にも非常に珍しいのですが、国際開発研究科の学際性格と教員の人材育成にける熱意、そして参加学生の「あれはタメになった」「これは必要」という声が、この継続を可能にしてきたと思います。

開発実務経験を持つ教員の知恵と学術交流協定校の積極的協力も研修の質向上にとって大きな力となりました。

今回「イニシアティブ」採択によってTV会議システムを導入し、研修用データベースを構築することができました。今後は海外・国内実地研修で得た知見を研修地にフィードバックし、地域貢献・国際貢献を果たしていく予定です。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

平成17年度より開始された文部科学省の支援事業。創造性豊かな若手研究者養成のため、大学院における意欲的かつ独創的な教育の取り組み（「魅力ある大学院教育」）を重点的に支援する。国際開発研究科の採択テーマは「国際開発分野における自立的研究能力の育成～ワールドワーク能力強化を中心に～」。

国際開発研究科
Graduate School of International Development

国際開発研究科は、日本初の総合的な開発系研究科として1991年に設立された。以来、国際開発の現場感覚を養うため国内外での実地研修を教育の柱の一つとし、平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択された。学生の半数が留学生である。

教員のコミュニケーション力が、授業の質を高めていく上での原動力となっています。

教員相互がコミュニケーションを図りながら、授業の質を高めていく。その姿勢をより多くの教員が持つことが、名古屋大学全体における教育成果を高めていく上での基本だと思います。私が委員長を務める「FD・教員データベース専門委員会」では、そのための取り組みを積極的に実施しています。たとえば「グッドプラクティス報告」。学生に授業評価アンケートを実施し、その結果、評価の高い授業を行っている教員に内容を報告してもらう機会を設けています。

また高校や実社会との教育面における連携も重要なテーマだと思います。現在、高校生向け講座の開講、実社会で活躍する人々を招いての講義などが本学では実施されていますが、これらをさらに発展、充実させることが望ましいと考えます。



速水 敏彦 Toshihiko Hayamizu
大学院教育発達科学研究科教授

1947年生まれ。専門は教育心理学。現代人が所有しがちな、他者を否定したり、軽視したりすることのでられる有能感を「仮想的有能感」と命名し、分析している。著書「他人を見下す若者たち」は、大きな話題を呼んでいる。

戦略と戦術を持つエンジニアを育成することは、基幹大学としての重要な役割。

正答のない課題に対して、自分で答えを見つける。さらには、自分で答えを創っていく。プロセス基礎セミナーは、このような感性を養うことを目標としており、実験装置の設計、資材の手配、製作に至るまで、すべて学生自身の手によって進められます。また、若手教員十数名が参画していることも、この科目ならではの特色。どのような課題を設定すべきか、どのように進めていくべきかについて、知恵を出し合いながら授業内容の充実を図っています。

単に課題解決を図るだけでなく、ニーズを掘り出し、市場を開拓していく。自らシナリオを描いてチームを動かしていく。このような素養を持つエンジニアを育成していくことは、地域の基幹大学としての重要な役割だと考えています。



プロセス基礎セミナー
Seminars on Fundamentals of Processing
工学部化学・生物工学科 分子化学工学コース

分子化学工学コースで2年次前期に開講される必修科目。少人数のグループに分かれた学生が「実験を伴う正解のない課題」に取り組み、コンペ形式で解決法と結果を競う。専門分野に進むにあたっての重要な導入科目として位置づけられている。

大切なのは、壁を乗り越える力を学生時代に育むこと。

担当する科目の一つ「病因検査技術開発法Ⅰ」では、学生に「検査材料から病因となった細菌を見つけ出す」というテーマに取り組んでもらっています。学生に与えるのは、検査試料として病院で検出された菌、患者さまの年齢・性別・臨床診断名・検査材料名といったデータだけ。どのような検査法を用いるべきか、どうすれば効率的に見つけ出すことができるのかについては、学生自身が考えながら進めます。試行錯誤の連続の中で学生たちはたいへん苦労しますが、それを乗り越えることで大きく成長していく自分を実感しているようです。

壁を乗り越える力は、社会に出たときに欠かせません。知識・技術以外にも、ぜひこうした力を学生時代に身につけてほしいと考えています。



伊藤 秀郎 Hideo Ito
医学部保健学科教授

1944年生まれ。専門は病原微生物学。週刊文春2006年3/30号に掲載された「現役学生2000人が選んだ面白い、自慢の講義」に担当科目「病因検査技術開発法Ⅰ」が選出されている。検査技術科学専攻の就職委員も業務し、学生への進路指導を行っている。

FD・教員データベース専門委員会

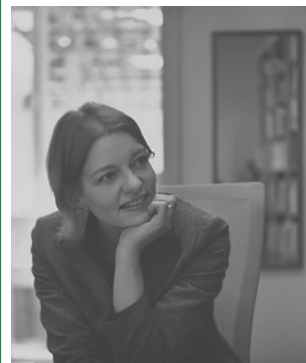
FDとはFaculty Developmentの略。教育の質の向上を図ることを目的に設置された委員会。授業改善をテーマにした研修会・講演会の開催など、さまざまな活動を展開している。

研究と教育の国際交流、国際協力を進め、世界に開かれた大学へ。

基幹大学の使命の一つは、国際協力・交流拠点としての役割。
名古屋大学では、留学生や外国人研究者の受け入れ、派遣体制を整備し、
研究と教育の国際交流、国際協力プロジェクトへの参画を進めています。
現在、42カ国・地域、203の大学・研究機関と学術交流協定を締結。
世界へ、その存在感を示しています。

高等教育は"Brains Business"。
国際市場を意識した
政策がこれから求められます。

現代の学生は、国境にとらわれず、
自分のビジョンや研究目的に合う
進路を世界中の大学の中から選
んでいます。こうした動きの中、高等
教育は"Brains Business"とも呼ば
れ、国際市場で競争が繰り広げら
れるサービス業としての側面が強
くなっています。
これからの大学は常に世界の
教育界のトレンドに注目し、海外大
学との連携を深めながら、新しい
教育システムやカリキュラムの構築
に取り組む必要があると思います。
名古屋大学ではすでに「国際学
術コンソーシアム21」「国際企画室」
などの取り組みが展開されていま
すが、今後も国際的な視野を持つ
教職員の養成、英語による研究・
教育プログラム提供の拡大など、
国際政策を総合的に進めることが
より重要になってくるでしょう。



石川 クラウディア Claudia Ishikawa
留学生センター講師

短期交換留学受入れプログラム「NUPACE」のコー
ディネータを担当。1996年の開始時からカリキュラム
の構築、広報活動、海外大学との交渉、学生との連
絡など、運営全般にわたって中心的な役割を果た
している。「比較移民法」「出入国管理政策」を研究。

ニーズとシーズの出会いが
法令翻訳の研究に発展し、
国際貢献につながりました。

法令翻訳システムの構築は、法
学研究科の先生との共同研究から
始まりました。日本の法令の外国
語訳を望む声が高まり、膨大な法
令データを管理する必要もあって、
我々の情報技術を活用することにな
ったのです。結果として国の要
請にも応える学官連携の研究に
発展し、現在に至ります。
翻訳にはネイティブが欠かせま
せんが、名古屋大学には留学生が
多く、それもこの研究を進展させ
た理由の一つです。欧米以外の国
や民族の留学生もいますので、各
国の言葉の翻訳を情報技術で支
援したいと考えています。
今回は法律分野での応用でし
たが、我々の技術シーズはどの分野
にも応用可能です。ニーズとシーズ
が出会うことで国際社会に貢献で
きるのであれば、エンジニアの立場
からお役に立ちたいと思います。



外山 勝彦 Katsuhiko Toyama
大学院情報科学研究科助教授

1961年生まれ。専門は知識情報処理、自然言語
処理。外山グループでは情報技術を用いた法令
翻訳支援を行うため、日本法令翻訳システムの構
築に向けた研究を推進。2006年、「法令用語日
英標準対訳辞書」をWeb上で公開した。



真の国際化の実現には、
価値の高い研究成果を生み出す
体制づくりが欠かせません。

私の研究の目標は、ギリシアとエジプト、双方の
古代文明を「交流」という視点から解明することで、
古代東地中海における新たな世界像を描き出す
こと。それは、異なる文明の架け橋となっていた人々
の存在に光を当てることに他なりません。「文明の
衝突」という言葉に象徴されるように、国家間の対
立が先鋭化している今、この研究は大きな意義を
持つものと実感しています。
国際化とは、研究の世界でいえば「国際競争」
なんです。単に海外の研究者と交流し、吸収する
だけでは、本当の国際化とはいえません。こちらか
ら新しい発見を伝えるからこそ、研究者として対等
に交流することができます。真の国際化を実現す
るには、発信する中身、つまり価値の高い研究成
果を生み出す体制づくりが欠かせません。
古代ギリシア文明と古代エジプト文明。私のよう
に両方を研究対象とすることは、実は欧米の大学
では考えられないことなのです。古代ギリシア文明
は古典学。古代エジプト文明は中東研究。欧米で
は扱っている学部自体が違うのです。このような学
問分野の壁を越えた研究に取り組める柔軟性も、
名古屋大学の良さの一つだと思います。

周藤 芳幸 Yoshiyuki Suto
大学院文学研究科教授

1962年生まれ。東地中海を舞台とする古
代ギリシア文明と古代エジプト文明のダイ
ナミックな交流の歴史を、考古学的な方法
によって解明する研究に取り組み、その成
果は世界的な注目を集めている。モットー
は「ナイルのほとりでギリシアを考える」。

帰国した留学生たちと
情報交換のできるネットワー
クづくりが今後の課題。

留学生からの依頼や相談に応
じる際、心がけているのは、できる
だけ丁寧に話を聞くことです。留
学生の皆さんは、文化も習慣も違う
国にきて戸惑いや不安も大きいと
思うのです。年齢も近いですし、身
近な相談相手でありたいですね。
名古屋大学が草の根レベルで
さらなる国際化を進めるためには、
卒業した留学生たちと、継続性の
あるネットワークを構築する必要が
あるのではないのでしょうか。在学中
に深めた親交が、卒業後にとぎれ
てしまうのはもったいないですよ。
母国と名古屋大学との架け橋にな
ってもらったり、海外にいる卒業生
同士が情報交換したり。そんな、つ
ながりを持続させていくことができ
るようなネットワークづくりが、今後の
課題だと思います。



堀上 美里 Misato Horigami
情報文化学部・情報科学研究科 教務学生掛員

1978年生まれ。情報文化学部の教務学生掛にお
いて、留学生に関する業務全般を担当。在籍状
況の管理、奨学金や宿舍・医療費補助などに関
する事務手続きをはじめ、留学生からのさまざま
な問い合わせや相談に対応している。その他、多様
な教務関連業務も担当。

NUPACE

名古屋大学短期交換留学受入れプロ
グラム(Nagoya University Program for
Academic Exchange)。学術交流協定校
の学生が4～12カ月にわたり、名古屋大
学において日本留学を体験するもの。教
育プログラムは「日本語研修」「日本研究・
国際理解科目」「専門分野科目」で構成
される。

国際学術コンソーシアム21 (Academic Consortium21:AC21)

名古屋大学の主導のもと、世界各国の大
学や研究機関との協働により2002年に
設立。高等教育の発展のために、グロー
バルなレベルでの相互協力を一層促進し、
国際社会・地域社会に貢献することを目
的としている。

国際企画室

名古屋大学の国際交流活動に関する全
学的な連携支援策の企画・立案、調査分
析、連絡調整を行っている。「国際学術
研究部門」「国際教育交流部門」「国際
開発協力部門」「国際交流マネジメント
部門」の4部門を擁する。

大学の誇る知的成果が、 地域社会の課題を解き、未来へ導く。

地域社会が抱える課題は、今、複雑で多岐にわたります。
その発見と解決に向け、社会との連携が大学には求められています。
名古屋大学では、産学官のパートナーシップを一層強くするとともに、
地域の文化や産業の振興、教育への貢献を目指し、
知的成果の社会への還元を進めています。



大学が社会から問われているのは、知の拠点としての総合力。

工作のスキル向上を図るとともに、アイデアを形にする創造の喜びを学生に体験してもらう。それが創造工学センターの役割です。こうした喜びを市民の方々にも体験していただくとう「モノづくり市民公開講座」を開講しています。講座の内容は、学生が行っている実習を一般市民向けにアレンジしたもの。一枚の金属板から、さまざまな工作機械を使って作品を創り出します。また、加工のメカニズムを分かりやすく解説する講義も実施。中学生からお年寄りまで幅広い年代の方々に参加いただき、たいへん好評を得ています。

今、大学が問われているのは、知の拠点としての総合力です。世の中には情報があふれています。しかし、そのほとんどは加工された情報です。自ら見て、触って、考えることで得た「一次情報」をいかに社会へと発信することができるか。それが大学の価値を決めます。
大学とは、社会に支えられることで初めて存続できる組織です。「名古屋大学があって良かった」—そう地域の方々に感じていただけるよう、これからも市民公開講座などを通して、名古屋大学ならではの「濃い一次情報」の提供を目指していきたいと考えています。

高度総合工学創造実験
メーカーなどに在籍する現場のプロを講師に招き開講。世の中の現実課題に対して、分野の異なる学生が小グループ編成で問題の設定から解決まで取り組む。

工学研究科
創造工学センター
Creation Plaza,
Graduate School of Engineering
2001年に設置。「機械工作室」「電気工作室」「セミナー室」などの施設を整え、機械系の大学院生・学部生の実習の場として活用されている。同センターで行われる大学院博士課程前期課程の科目「高度総合工学創造実験」は、日本工学教育協会賞（業績賞）を受賞している。

性別に関わりなく
個性で輝く社会を目指して
制度の整備と意識改革を。

男女共同参画の目的は、性別に関わりなく個性で輝く社会をつくること。そんな社会の実現を目指し、名古屋大学は旧帝大の中では初めて男女共同参画室を設置しました。参画室では「名古屋大学こすもす保育園」の運営、育児支援、女性教員の増員活動などのほか、街に出て産官と連携したセミナーも行い、先進的な取り組みが評価されています。
男女共同参画において、制度やインフラの整備とともに大切なのが意識改革です。たとえば、大学の先生に女性が少ないのはなぜでしょう?そこでは本人の資質ではなく、昔からの性別役割分担感やイメージによって、女性が無意識に（悪気もないのに）排除されている例も見られます。私が生物学的なお話をする事で、そうした固定観念が少しでも払拭できたらうれしいです。



東村 博子 Hiroko Tsukamura
大学院生命農学研究科助教授

1959年生まれ。専門は生殖生理学生殖科学・神経内分泌学。2006年、名古屋大学男女共同参画室長・男女共同参画担当総長補佐に就任。脳の性分化機構の解明に取り組む生物学者の視点から、男女平等の概念をわかりやすく紹介し、学内外で活躍する。

大学人は、これから
もっと街へ出て、社会の動きを
肌で感じるべきですね。

大学院生の就職問題や医工連携委員会の設立、サッポロビール跡地利用の医工連携インキュベーター設立などに関わったのがきっかけで、社会と大学との関わりを改めて考えるようになりました。
昨年教育研究支援センター長になって、社会に開かれた大学の具体化の一つとして着手したのが、センター内規の変更です。センターにある電子顕微鏡や各種分析機器、動物実験施設などを、他大学や企業の研究者でも、使えるようにしました。
今後の課題は社会へのアピール。大学内の変革の努力が、外に十分伝わっていないからです。そのためには、もっと外へ出ないといけない。まだ待ちの体質が強いのですが、地域や社会に直接触れて、大学人に何が必要とされているのか感じることは、とても重要だと思います。



太田 美智男 Michio Ohta
大学院医学系研究科教授

1946年生まれ。名古屋大学医学系研究科で病原菌研究に取り組みつづける。研究の中で、分析機器と動物実験のエキスパートとなり、昨年その2分野を統合した医学系研究科附属教育研究支援センター長に就任。また、産学官連携担当総長補佐でもある。

産業界だけでなく、
市民との連携をつくる動きが、
今後さらに必要になります。

2002年から「長久手平成こども塾」を研究室の学生や地域のボランティアと一緒に支援しています。その内容は、子どもたちを対象とした環境学習プログラムを地域の人々と共同で開発し、その運営も含めてサポートするというもの。身近な自然をフィールドに、環境意識を楽しみながら高めてもらうことを目的としています。
名古屋大学も含めて、一般的に大学は現在、産業界との連携を強めています。しかし、市民サイドとの連携をつくる動きについては、まだ不十分ではないでしょうか。大学には地域の課題に対して、解決策を提言する立場として関わるよりも、それらの課題を解く仕組みを実際に用意したり、意見をとりまとめてリードする役割が今後、もっと期待されると思います。



清水 裕之 Hiroyuki Shimizu
大学院環境学研究科教授

1952年生まれ。新国立劇場、愛知芸術文化センター、さいたま芸術劇場など、全国の劇場・ホールの立ち上げ、設計に関わり、1993年には「世界劇場会議」の事務局代表を務める。近年は公共文化施設の「管理運営」「市民参加」など、ソフトに関するテーマを中心に研究。

名古屋大学こすもす保育園
2006年に開園した学内保育園。男女共同参画事業の一環として、名古屋大学教職員の仕事と子育ての両立を支援し、雇用環境を整備するために設置された。国立大学法人が設置主体となり保育園を運営する全国でも珍しい試みとして、関心を集めている。0歳児から未就学児を対象とする。

名古屋医工連携インキュベーター
名古屋大学、名古屋工業大学及び名古屋市立大学が有する医工分野の研究成果を活用して、ベンチャーを志す起業家や新事業展開を図る中小企業者への公的賃貸施設。インキュベーションマネージャーが常駐し、県、市及び地域の産業支援機関などとも連携し、総合的な入居者支援を行う。

巨大コミュニティの発展を支えるのは、独自の組織戦略と運営能力。

国立大学の法人化後、名古屋大学は自主自律の道を歩みはじめました。これまで以上に研究教育活動をバックアップするため、ニーズに柔軟に対応できる管理体制づくりを推進。学生・教職員合わせて約2万人からなる巨大組織の再編を行い、戦略的な運営管理を進めています。



国立大学にとって、マネジメントという試みはまだはじまったばかりです。

国立大学が法人化でいちばん変わったのは、自ら決定するようになったことでしょう。以前は、省庁判断を待っていたことを、主体的に決めなくてはならない。こうした状況下では、大学にもマネジメントの手腕が問われてきます。大学の基本的な使命は、常に新しいものを生み出し、それを社会に還元すること。そのための経費は惜しみつもりはありませんが、逆に無駄については、まだまだ省いていくつもりです。これまで縦割りのな体制だったために、全学的に見れば無駄が存在したのは確か。風通しをよくするだけでも、経費は節減できるはず。そのために

も、毎日キャンパスのあちこちを歩き回って、現状把握に努めています。研究でも施設マネジメントでも、あくまで現場が大切なので。今後は、研究のクオリティをマネジメントによってコントロールする仕組みを作っていきたいと考えています。それに着手できると、大学のマネジメントは俄然、面白くなるはず。ともあれ、大学にとって全学的マネジメントというのは、まだはじまったばかりの試み。Plan,Do,Action,Checkの繰り返しで、成果の出せる運営を目指しています。

杉浦 康夫 Yasuo Sugiura
理事(病院・施設整備・環境安全関係担当)

1947年生まれ。筑波大学、福島県立医科大学など、いくつかの大学の医学部で研究を重ね、1996年、名古屋大学医学部に教授として赴任。医学系研究科長を経て、昨年4月より病院・施設整備・環境安全関係担当理事に就任。副総長。

博物館の見学をきっかけに、名古屋大学のサポーターを増やしたいですね。

名古屋大学博物館の役割は二つあります。一つは、文系・理系を問わず学術資料の収集、研究、保管、継承です。研究や教育に使用された貴重な資料の散逸を防ぎ、知的財産として将来の活用に使っています。もう一つは、社会に開かれた名古屋大学の窓口です。大学や学問の魅力を伝えるために、独自の展示をしたり、講演会やコンサートを開いたり、約600種の植物が生育する博物館野外観察園を広く一般に開放しています。市民の皆さんや次世代の若者に、学問や文化のおもしろさを身近に感じてもらうこと。それは、名古屋大学のサポーターを増やしていくことと同じです。博物館は知の発信源である大学の玄関ですから、敷居を下げ、開口を広くして特色ある活動に挑戦していきたいと思っています。



西川 輝昭 Teruaki Nishikawa
名古屋大学博物館長

1949年生まれ。大学院環境学研究科教授も兼任。専門は動物分類学、海洋生物学、博物館学。博物館創設以来の専任教授で、2006年、博物館長に就任。モノの価値はいつ出るかわからない。だからこそ資料を保存し、後世に伝えていくことが重要と語る。

経済界・産業界へ、政策提言のできるセンターを目指し、組織づくりを進めています。

大学院経済学研究科のもとに「国際経済政策研究センター」が設置されている意義。それは、総合的な観点から理論・実証研究を進められる点にあります。経済学研究科の研究分野は、経済学・経営学・会計学と分かれています。当センターはそれらの分野を横断的に研究し、さらに産学官連携を推進することを運営方針としており、現在は東アジアにおける経済・ビジネスを中心とした研究に取り組んでいます。経済界に対して政策提言ができる。産業界に対して実務への貢献ができる。当センターは、この二つの目標を軸にした組織づくりを進めています。現在、中央官庁からも教員を受け入れています。今後はさらに交流を深め、現実的な政策提言を積極的に行っていきたいと考えています。



高桑 宗右エ門 Soemon Takakuwa
大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター長

1951年生まれ。研究室では「トヨタ生産方式などの工場の生産管理」「医学部附属病院の新外来病棟の設計・分析」「国内外の企業のサプライチェーンシステム」などの研究を推進。経済学研究科副研究科長も務め、学部・大学院のカリキュラム改革の準備を進めている。

「全学技術センター」設立という技術職員の組織再編は、全国から注目を集めています。

教育・研究の高度化には優れた教員並びに最新の設備や機器が必要ですが、それらを支援する技術職員も不可欠です。私が技術長を務める医学技術系には、医学の研究を支える分析機器の保守・管理や実験動物を飼育・管理する業務などがありますが、とりわけ、系統解剖学実習の支援業務、病理・法医学解剖の介助などは、倫理的にもアウトソーシングが不可能な大切な業務です。名古屋大学では今「技術職員組織の全学的な再編を図る」ことを中期計画に掲げています。その内容は、以前は各研究科・学部のもとに置かれていた技術組織を、全学に開かれた技術拠点として再編成しようとするものです。この構想は「全学技術センター」の誕生によってすでに具現化されており、全国の先駆けとして各大学から注目を集めています。



伊東 多加志 Takashi Ito
全学技術センター部局系技術支援系医学技術系技術長

1948年生まれ。長年にわたって医学系の技術職員として教育・研究の支援に携わり、2004年「全学技術センター」設立と同時に医学技術系技術長に就任。また、全学技術支援検討WG委員、全国解剖組織技術研究会の幹事も務める。

名古屋大学博物館
2000年4月に開館。専任教員は館長も含め7名。入場無料で年間の入館者は1万人を超える。特別展や企画展の開催、「中学生のためのネイチャーウォッチング」など次世代教育に力を入れているほか、名古屋市などと連携して生涯教育にも貢献。近年は市民からの寄贈資料が増え、それを活用した展示も行う。

学術情報を運用し、学問の環境を整えて、知の創造と交流をリードする。

名古屋大学が、知の創造と交流を進めていくためには、
 持てる学術情報を総合的に運用する基盤づくりや、
 他大学や地域、世界への学術情報の公開が欠かせません。
 また、機能や安全面の備えはもちろん、文化性の高いキャンパスを整備し、
 国際水準の総合大学にふさわしい環境を創造していきます。

数学界の研究成果を、
 世界中に向けて
 発信する役割も担っています。

当研究科の教育研究支援活動は、かつて事務室が担当していました。しかし事務室で行う支援活動はどうしても「管理」という要素が強くなりがちです。そこで、単なる管理の枠を超え、より現場に密着し、そしてより有機的に教育と研究を結びつけるための専門組織として「教育研究支援室」は設置されました。

また、私たちは数学界の研究成果を社会へ、そして世界へ発信する拠点としても大きな役割を担っています。数学という学問は、自然科学、最近では社会科学においても重要性を増しつつあります。世界中から集めた研究成果を広く伝えていくことは、数学界はもちろん、学術研究全体への貢献につながっていくはず。そんな大きな可能性に期待して活動に取り組んでいます。



多元数理科学研究科
教育研究支援室
Education & Research Support Office

研究科に対する教育支援活動のマネジメントだけでなく、「Nagoya Mathematical Journal」の編集・出版、各種研究集会（国際研究集会を含む）の事務局、外国人研究者へのサポート、広報、公開講座など多岐にわたる活動を展開。「カフェ・ダヴィッド」の運営補助も担当している。

名古屋大学の、そして日本の、
 学術研究の高度化を
 サポートしていきたい。

情報連携基盤センターは、大学全体の情報環境の整備・運用を担う組織です。学内においては「NICE」の管理・運用をはじめ、各種の情報基盤サービスを提供するとともに、次世代の情報環境構築に向けた活動を展開しています。また、当センターは、全国の研究者が利用できる「全国共同利用施設」として、国内トップクラスの性能を持つスーパーコンピュータを導入し、さまざまな研究者からの大規模な計算ニーズに応えています。

名古屋大学では2006年4月に「情報連携統括本部」が創設されました。当センターはその主要組織として、情報基盤サービスのさらなる充実を図り、今後も名古屋大学の、そして日本の学術研究の高度化をサポートしていきたいと考えています。



伊藤 正彦 Masahiko Ito
情報連携基盤センター事務長

1951年生まれ。情報連携基盤センターの事務長として管理運営業務全般をリード。学内外に多数の利用者を持つ同センターの円滑な運営を支えている。また、より経済的・効率的な運営を実現するために、同センターの業務効率化・合理化に関する取り組みも行っている。



古書に込められた 古人の思いを伝えていくことは、 大学としての使命です。

名古屋大学の附属図書館は豊富な古書を所蔵していますが、その多くはあまり有効に活用されていません。そこで、まだ知られていない古書の存在を世の中に伝えようと、図書系の職員有志で結成されたのが私たち「古書の会」です。古書には、後世に伝えようという古人の意志が込められています。その思いを汲み上げ、古人と現代人とのコミュニケーションを支援していくことは、大学としての使命だと私たちは確信しています。

しかし古書は、いわば「寡黙な資料」です。現代の書物のように、伝えたい内容を雄弁に語りかけてはくれません。思いを聞き取るには、崩し字を読解する訓練はもちろん、関連する資料を調べるなどして、読む側が習熟する必要があります。こうした技能を磨くために、私たちは定期的に勉強会を続けており、また、その成果は展示会や古書データベースを通して発信しています。

名古屋は古くから東と西の間にある要所として栄えてきました。その都市の基幹大学である名古屋大学には、地域の資産として貴重な古書がまだまだ数多く残されています。これからも眠っている古書を世の中に発信し、古人の声を伝え続けていきたいと考えています。

古書の会

Kosho no Kai

図書系職員から有志を募り、2000年に発足。2002年には附属図書館展示会「古書は語る」を中心となって開催し、また中国元時代の漢籍にみる蔵書印に関する調査報告を附属図書館研究年報に掲載した。それらの活動が評価され「国立大学図書館協議会賞」を受賞。2006年には附属図書館春季特別展「『地獄物語』の世界―江戸時代の法と刑罰―」の開催に協力した。

Nagoya Mathematical Journal

数学界の研究者向け専門誌。年4回発行。初刊が発行されたのは1950年。世界各国の研究者から論文が投稿され、審査を通ったものだけが掲載される。発行部数は約1,000部で、8割以上が海外の大学や研究機関に送られる。

カフェ・ダヴィッド

多元数理科学研究科のオフィスパワー。通常のオフィスパワーは、教員が研究室で学生からの質問・相談に応じるが「カフェ・ダヴィッド」の場合は、ヒルベルトスペースと呼ばれる開放的なラウンジで行われる。学生と教員の交流を自然に深める機会として欠かせないものとなっている。

NICE

名古屋大学キャンパス情報ネットワーク（Nagoya university Integrated Communication Environment）。キャンパス間を専用線で接続し、高速ネットワーク環境を実現している。

情報連携統括本部

全学的な視野に立って、情報基盤の整備を統一的に、そして戦略的に企画・立案・推進するために設立された組織。

附属図書館所蔵の古書

神宮皇學館文庫、高木家文書、伊藤圭介文庫、岡谷文庫、小林文庫、青本文庫、森本文庫など、多様な分野の和古書、漢籍を所蔵している。

古書データベース

所蔵する古書のデータベース化を推進。エココレクション（高木家文書、伊藤圭介文庫など）、<名大システム>古典籍内容記述のデータベース（書名、著者などの書誌情報だけでなく、要約した内容も記述した画期的なデータベース）を公開している。
http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/db/e_collect/index.html

人と人との絆から生まれる力が、 社会と大学の明日へ、新しい関係を築く。

大学と社会との連携が、一層求められる時代にあって、
名古屋大学の大きな強みとなるのが、「名古屋大学全学同窓会」です。
世界中のあらゆる分野に広がる同窓生を核に、
学生や教職員なども含めたユニークなネットワークは、
法人化後の大学の活動を、さまざまな形で支えています。



学生が運営する同窓会だからこそできる、新しい発想を取り入れていきたい。

なぜ「同窓会」のページに学生が登場しているのか、
不思議に思う方もいらっしゃるかもしれません。実は私たち
情報科学研究科同窓会の役員は、ほとんどがまだ学生なのです。
もともとは同学年のメンバーで、社会に出てからも連絡
を取り合えるようメーリングリストをつくろうとしたことがき
っかけ。それが「やはり同学年だけじゃなくて縦のつながりも大切にした方が
良いのでは?」「どうせなら同窓会にしよう」と話が膨らんで設立に至りました。
設立にあたっては運営のルールづくりや学生への告知、

活動内容の検討など、いろいろな苦労がありました。が、
将来にわたって続いていく組織の礎を築けたことには、
とても感慨深いものを感じます。
学生の運営する同窓会ということで至らない面もいろいろとありますが、
逆に若者ならではの柔軟な発想を活かして、新たな同窓会のあり方を構築していけたらと張り切っています。
一人ひとりの声が反映されやすい雰囲気もありますし、それをこの同窓会の伝統にしていきたいですね。
後輩の皆さんにも、人脈を広げるためのツールとして同窓会をどんどん活用してほしいと思います。

名古屋大学全学同窓会
大学と社会を結ぶ組織として、2002年10月に設立。大学と同窓会がともに社会貢献を果たすことを目的としていること、卒業生や修了生だけでなく、教職員、旧教職員、短期留学生、現役学生（準会員）など名古屋大学関係者すべてを構成員としていることが大きな特徴。

ホームカミングデイ
卒業生、保護者さらに一般市民に向けたキャンパス・イベント。大学の現況を紹介するとともに、恩師や学友との再会、在校生との親睦を深めるための機会として年1回開催される。

情報科学研究科同窓会
Graduate School of Information Science Alumni Association
情報科学研究科が創設されたのは2003年。その1年半後の2004年11月に本同窓会は誕生した。当時はまだ修了生はおらず「学生だけの同窓会」としてスタート。現在は修了生も会員となっているが、運営は学生が担当。ホームカミングデイへの参加、研究科とタイアップした公開セミナーの開催など、若者ならではの発想を取り入れた活動を行っている。

世代を超えたコミュニティを大切にしながら、時代を進める研究に挑戦してください。

中部大学の学長として現在取り組んでいるのは「知識伝達型」の教育から「知識創造型」の教育への転換です。学生の持つ行動力と感性。教員の持つ論理性と経験。これらを効果的に融合させることで、生きる感動、知る感動を味わえる教育をつくっていこうと、教員・学生と一緒に日々奮闘しています。
名古屋大学の教員・学生も、世代を超えたコミュニティをぜひ大切にしてください。仲間同士の共生がなければ、競争はできません。価値観の異なる人間と一緒に、一つのゴールを目指すことは、お互いに自分を磨くことにつながります。目標を高いところに置き、年配の教員も、若い教員も、学生も、みんな一体となって、時代を進める研究に挑戦することを期待しています。



山下 興亜 Okitsugu Yamashita
中部大学 学長

1940年生まれ。名古屋大学大学院農学研究科修士課程修了。専門分野は、農学・分子昆虫学・養蚕学。特に「昆虫ホルモン」「昆虫休眠と変態の分子機構」について研究。1998年名古屋大学副総長、2001年中部大学副学長を経て、2005年より現職。2001年紫綬褒章受章。

最も元気のある地域の最高学府として、日本の課題解決に取り組んでほしい。

日銀マンには、地域の企業との対話や各種統計データなどを通して、景気情勢を的確に把握する能力が求められます。法学部で学んだ物事を論理的に考える思考力、そして4年間在籍した「学生法律相談所」で育んだコミュニケーション能力は、日銀マン生活の大きな礎となっています。
名古屋は現在、日本で最も元気の良い、活力あふれる地域です。日本経済全体も回復基調が続いています。しかし長期的にみると、日本は「人口減少・高齢化問題」「環境・エネルギー問題」「食糧自給問題」そして「人としての道徳や絆の問題」など、いくつもの大きな問題を抱えています。ぜひ、最も元気な地域の最高学府である名古屋大学が、こうした課題に対する研究・教育を進め、積極的に情報発信していただきたいと願っています。



市原 好二 Koji Ichihara
日本銀行京都支店長

1954年生まれ。名古屋大学法学部卒業後、日本銀行入行。大阪支店文書課長、函館支店長などを経て2004年から現職。北海道では数名の同窓生で「和（なごや）会」を結成。現在も「同窓会関西支部」において経済講演をするなど、同窓生との親交を深めている。

学際的な知の交流の場へ同窓会を成長させる。それも今後の目標ですね。

今はKnow-whoの時代。名古屋市役所には経済学部出身者の同窓会があり、人脈の点では非常に仕事が進めやすく、名古屋大学出身であることにメリットを感じています。一方で同じ背景を持つ者同士、発想も似通いがちですから、それは常に自戒しつつ仕事をしてきました。
そこで今後の大学に期待するのは、全国から多様な人材を集めハイブリッドな交流を行うことです。学生だけでなく、教員にも外の視点を取り入れることが必要でしょう。経済学部には実学を重視する伝統がありますから、実学でもって地域貢献できるよう同窓生として協力できることもあると思います。また、同窓会が学部を越えて議論したり、知的な生産物を大学に提案できる、学際的な知の交流の場へ成長できるといいですね。



吉井 信雄 Nobuo Yoshii
名古屋市交通局長

1947年生まれ。名古屋大学経済学部卒業後、総合研究開発機構（NIRA）主任研究員として政策研究（大都市政策）に従事。その後、秘書室主幹（特命担当）、総務局企画部長などを経て2004年から現職。名古屋大学大学院工学研究科非常勤講師なども歴任。

学生法律相談所
法学部の学生によるサークル。一般の方々からの法律相談に応じている。法律相談活動を通して「生きた法律」に触れ、法学の素養を高めるとともに、市民社会へ法知識を還元することを目的としている。

名古屋大学と一体となって、医療と教育の社会的なニーズに応えていく。

研究・教育の場であると同時に、高度医療を提供する医学部附属病院と先進的な中学・高等学校教育を提供する教育学部附属学校。どちらも名古屋大学のコミュニティの一員として、時代や地域が求める医療、教育ニーズに応えてきました。今後も大学との連携を強め、その役割を果たしていきます。



中・高・大が協同した教育の研究と実践によって、新たな教育モデルを目指したい。

スーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）に指定された多くの学校が、理数教科に特化した教育を行っています。しかし、本校では理数だけでなく、国語から英語、社会、体育、芸術、技術まで全分野から学校全体で教育に取り組むことを特色としています。なぜなら、今の中高生が地球市民として人文社会も含めた科学的思考力を身につけるためには、理数に限らず、ふだんの生活の中から科学への関心や興味を高め、幅広い素養を育成することが必要と考えるからです。こうした教育が推進できるのは、名古屋大学のキャンパス内にある併設型中高一貫校であり、先駆的な

教育研究が可能な環境にあるからです。以前より大学とは密接にパートナーシップを結び、各研究科教授による講座を開講してきましたし、文部科学省の研究開発学校として総合学習やキャリア意識の育成なども展開してきました。今回のSSHでは、これまでの成果を土台とし、中・高・大の協同で発達段階に応じた科学的思考力を育む教育課程を研究開発し、それに基づいて教育を実践することを目標としています。今後も大学との連携を強くしながら、本校からSSHの新たなモデルの構築を目指していきたいと思っています。

スーパーサイエンスハイスクール
文部科学省によって2002年度より開始されたプロジェクトで、理科・数学教育を重点的に行う学校を指定する。「高等学校及び中高一貫教育における理科・数学に重点をおいた取り組みを大学等の密接な連携の下で推進し、将来の科学技術系人材育成に資する」ことを目的とする。

教育学部附属中・高等学校
スーパーサイエンスハイスクール
推進委員会
Affiliated Upper and Lower Secondary Schools
SSH Promotion Committee

国立大学法人附属の併設型中高一貫校では初めて、2006年度より文部科学省が推進するスーパーサイエンスハイスクールに指定された。同時に発足した推進委員会は、附属中高の教員7名と名古屋大学の教員2名で構成される。



透明性と説明責任は、医療の基本。それを、組織全体で共有できるようにしたいですね。

医療の安全は、病院においては他のすべてに優先することがらです。最先端治療を行う大学病院といえども、医療機関としての使命を全うするためには、まず安全と安心のために可能な限り努力する必要があります。これまでは診療科ごとの体制で、それなりの成果をあげてきました。しかし患者さま側から見れば、名大病院という全体像が見えづらかったと思います。「医療安全」とは、事故をなくそうという後ろ向きの考え方ではなく、最終目的は医療の質の持続的向上です。

これからの医療は、こうした組織全体でのアプローチが、より重視されるでしょうから、病院全体の安全を管理するのは、非常に難しいことですが、これほどやりがいのある仕事もないと思っています。

相馬 孝博 Takahiro Souma
医学部附属病院医療安全管理部助教授

1955年生まれ。胸部外科医。国立保健医療科学院を経て、2005年7月、名古屋大学医学部附属病院の専従ゼネラルリスクマネージャー（GRM）就任。看護職GRMとともに、職種と部署を越えた医療安全を推進し、病院全体の医療の質向上を目指す。

大学病院の使命は、なによりも安全で質の高い医療。教育と研究が、それを支えています。

大学病院では、三本柱は「診療・教育・研究」と言われます。診療の基本は安全と質の確保であり、教育・研究は診療が保証されて成立するものです。看護の世界でも教育・研究は活発で、現役の看護師たちは積極的に学会発表を行ったり、学習にも前向きに取り組んでいます。ただし、看護は机上の理論では意味がありません。自身が医療現場で体験したことを経験的根拠として収集し理論化することがより重要です。医療と研究、両方に当たるのはもちろん重責ですが、一人ひとりが毎日の経験をまとめて再構築し、発表することで、より質の高い看護が可能になります。その結果実現できる、「考える看護」こそが、我々の誇りです。



三浦 昌子 Masako Miura
医学部附属病院看護部長

1956年生まれ。1977年名古屋大学医学部附属病院看護部入職以来、看護師ひと筋。ICU開設などにも携わる。2001年副看護部長として教育・情報を担当。2006年4月より、現職。

GRM（ゼネラルリスクマネージャー）
病院の中で、医療の安全管理と質向上にあたる職種。これまでの病院組織では兼任の仕事だったが、全体を統括する必要性から、専任者を設置する動きが進んでいる。その中でもマネジメントのみを行う専従職として医師を置く名古屋大学医学部附属病院の措置は、全国の大学附属病院の中でも先駆けとなるもの。

概要

概 略 （平成18年4月1日現在）	
総 長	平野 真一
理 事	大峯 巖（総務・企画関係担当）・副総長
	佐分 晴夫（人事・労務関係担当）・副総長
	杉浦 康夫（病院・施設整備・環境安全関係担当）・副総長
	杉山 寛行（教育関係担当）・副総長
	山本 進一（研究・国際交流関係担当）・副総長
	豊田 三郎（財務・事務総括関係担当）・事務局長
副 総 長	林 光佑（法務関係担当）※（学外）
	宮田 隆司（産学官連携関係担当）
	木村 洋一（学外）
監 事	湯本 秀之 ※（学外） ※印は非常勤
組 織	9学部（文、教育、法、経済、情報文化、理、医、工、農）
	8研究科（文学、教育発達科学、法学、経済学、理学、医学系、工学、生命農学）
	5独立研究科（国際開発、多元数理科学、国際言語文化、環境学、情報科学）
	3附置研究所（環境医学、太陽地球環境、エコトピア科学）
職 員 数	役員8名 大学教員1,782名 附属学校教員37名 事務職員・技術職員1,522名 合計3,349名
学 生 数	学部学生10,123名 大学院学生6,421名
面 積	土地面積3,247,222㎡ 建物面積718,790㎡ ※職員数、学生数、面積は平成18年5月1日現在

沿 革

●名古屋大学は1939（昭和14）年、医学部と理工学部の2学部で、我が国最後の帝国大学として創設されました。1947（昭和22）年に名古屋大学（旧制）と改称。1949（昭和24）年には、学制改革により、旧制名古屋大学、附属医学専門部、第八高等学校、名古屋経済専門学校、岡崎高等師範学校を包括し、文学部、教育学部、法経学部、理学部、医学部、工学部の6学部からなる新制名古屋大学として再出発しました。その後、1950（昭和25）年の法学部と経済学部の分離独立、1951（昭和26）年の農学部設置で8学部となり、総合大学として整備を進めてきました。1993（平成5）年、教養部改組に伴う大幅な教育改革を行い、新たに時代の要請に応える情報文化学部を9番目の学部として設置するとともに、学部四年一貫教育を導入しました。

●一方、戦後の学制改革によって1953（昭和28）年に修士課程2年、博士課程3年の新制大学院が設置され、文学、教育学、法学、経済学、理学、工学の6研究科で発足しました。その後、医学、農学の2研究科が設置され、当時あった8学部すべてが大学院を持つことになりました。

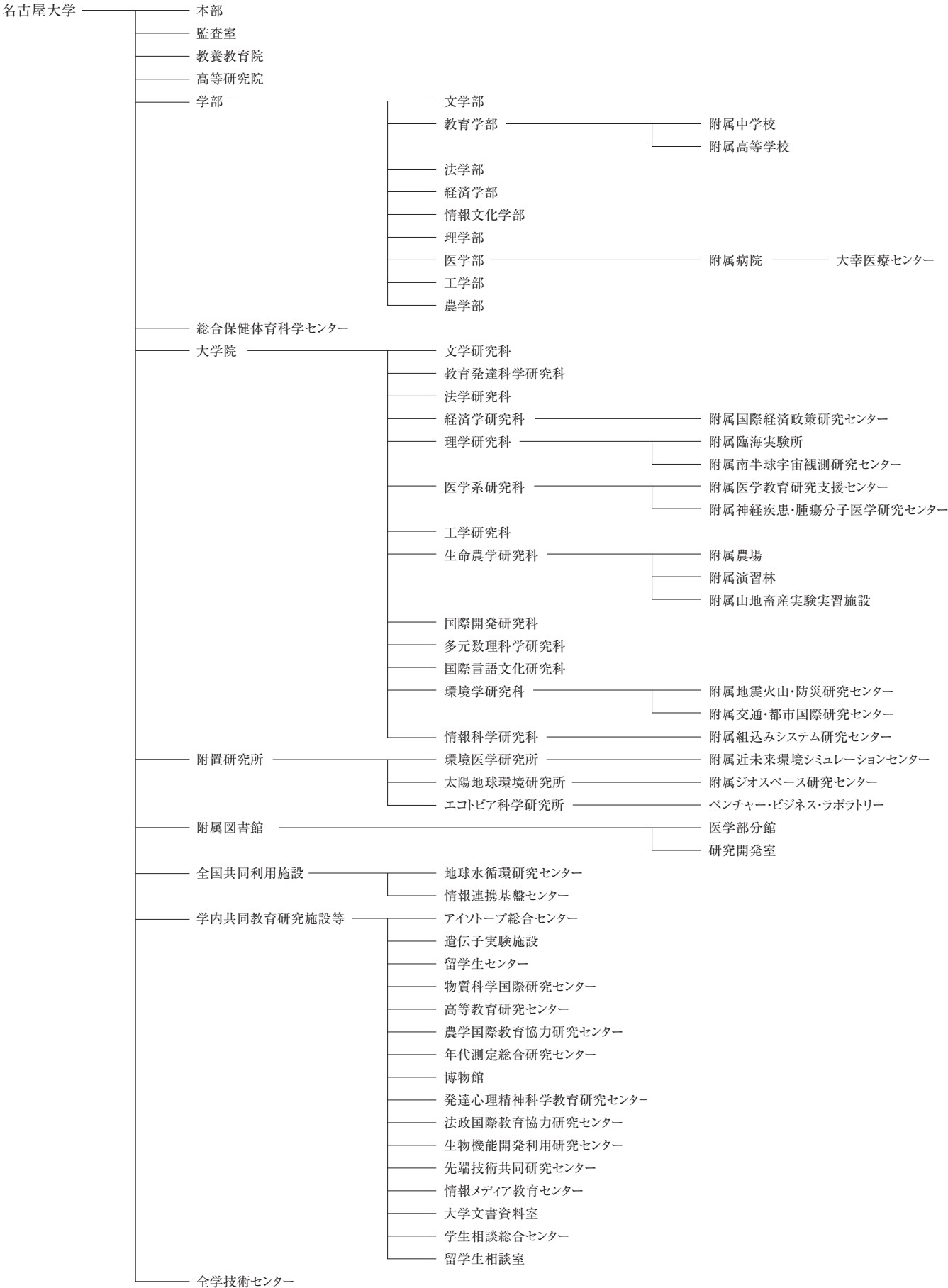
●また、学部に基礎を置かない大学院独立研究科として、1991（平成3）年に国際開発研究科、1992（平成4）年に人間情報学研究科、1995（平成7）年に多元数理科学研究科、1998（平成10）年に国際言語文化研究科、2001（平成13）年に環境学研究科、2003（平成15）年に情報科学研究科をそれぞれ設置（これにともない人間情報学研究科は廃止）し、現在、大学院は13研究科となりました。

●このほか、現在、3附置研究所、2全国共同利用施設、16学内共同教育研究施設等を擁しています。

●2004（平成16）年からは、国立大学法人名古屋大学として新たな設置・運営形態の国立大学となりました。

前身校期	1871（明治 4）年	仮病院 仮医学校開設
	1878（明治11）年	公立医学校設置
	1881（明治14）年	愛知医学校設置
	1901（明治34）年	愛知県立医学校設置
	1903（明治36）年	愛知県立医学専門学校設置
	1920（大正 9）年	愛知医科大学設置
	1931（昭和 6）年	（官立移管）名古屋医科大学設置
	1908（明治41）年	第八高等学校設置
	1920（大正 9）年	名古屋高等商業学校設置
	1945（昭和20）年	岡崎高等師範学校設置
帝国大学期	1939（昭和14）年	名古屋帝国大学創設 医学部と理工学部の2学部で発足 名古屋帝国大学臨時附属医学専門部設置
	1942（昭和17）年	理工学部を理学部と工学部に分離
	1943（昭和18）年	航空医学研究所設置（1945年廃止）
	1946（昭和21）年	環境医学研究所設置
	1947（昭和22）年	名古屋大学と改称
	1948（昭和23）年	文学部、法経学部を設置
新制大学期	1949（昭和24）年	新制名古屋大学として再出発 文、教育、法経、理、医、工の6学部で発足 旧制名大、医専部、八高、名経専、岡崎高師を包括 空電研究所を設置
	1950（昭和25）年	法経学部を法学部と経済学部に分離
	1951（昭和26）年	農学部設置
	1953（昭和28）年	文学、教育学、法学、経済学、理学、工学の6研究科を設置
	1955（昭和30）年	医、農の2研究科を設置
	1961（昭和36）年	プラズマ研究所設置
	1963（昭和38）年	教養部設置
	1973（昭和48）年	水圏科学研究所設置
	1977（昭和52）年	名古屋大学医療技術短期大学部設置（2001年廃止）
	1989（平成元）年	プラズマ研究所、核融合科学研究所へ発展
	1990（平成 2）年	空電研究所、太陽地球環境研究所に改組
	1991（平成 3）年	大学院国際開発研究科設置
	1992（平成 4）年	大学院人間情報学研究科設置（2003年廃止）
	1993（平成 5）年	教養部廃止、情報文化学部設置 水圏科学研究所、大気水圏科学研究所に改組（2001年廃止）
	1995（平成 7）年	大学院多元数理科学研究科設置
	1997（平成 9）年	大学院農学研究科を大学院生命農学研究科に名称変更
	1998（平成10）年	大学院国際言語文化研究科設置
	2000（平成12）年	大学院教育学研究科を大学院教育発達科学研究科に名称変更
	2001（平成13）年	大学院環境学研究科設置 地球水循環研究センター設置
	2002（平成14）年	情報連携基盤センター設置 大学院医学研究科を大学院医学系研究科に名称変更
	2003（平成15）年	大学院情報科学研究科設置
国立大学法人期	2004（平成16）年	国立大学法人名古屋大学設立 大学院法学研究科実務法曹養成専攻（法科大学院）設置 エコトピア科学研究機構設置
	2005（平成17）年	エコトピア科学研究機構をエコトピア科学研究所に名称変更（学内措置）
	2006（平成18）年	エコトピア科学研究所設置

組織・機構





発行年月／2006年6月
企画編集／名古屋大学広報室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-2016
<http://www.nagoya-u.ac.jp>